

大学一覽』(二八九一―九二年版)によれば正課外の随意学科として伊太利語一年間毎週二時間となっている。

二 東京外国語学校伊語学科(新制大学発足以前)

1 イタリア語の教官と学生

一八七三(明治六)年に開成学校から分かれて東京外国語学校が発足した当時は伊語科はなく、また副科目としてのイタリア語のコースもなかった。一八八五(明治十八)年東京外国語学校は廃校となり、一八九七(明治三十)年に東京高等商業学校附属外国語学校が設置されたときも伊語科はなく、第二語学としての伊語のコースは高商のほうに置かれていたようである。一八九九(明治三十二)年東京高等商業学校より分かれて、東京外国語学校が独立した年、上述の七語学科に加えて伊語学科が増設された。当時の修業年限は正科三年、専修科(夜間)は二年であった。最初の年の伊語教官には教授はおらず、講師の伊東平蔵と外国教師アルフォンソ・ガスコおよび囑託講師(非常勤講師)として吉田秀男が教えていた。最初のうち入学定員は本科が一応二〇名であったが、実際の応募者は一〇名くらいであったらしい。卒業生は四名から六、七名といった状態が第一二回卒業(一九一九年)まで続いている。しかも一九四二(昭和十七)年度入学までは大体隔年毎の募集であった。

最初の伊語教官である伊東平蔵(一八五六一―一九二七年)は一八七四(明治七)年頃、旧東京外国語学校でフランス語を学んだ後、ヴェネツィアの高等商業学校に留学した人で、一八八七(明治二十)年から一年間その学校で日本語の講師を務めたこともあった。帰国後、東京外語が独立し、伊語学科が創設されると講師に任命され、翌年教授と

なり、一九一三(大正二)年三月までイタリア語を教えた。伊東平蔵は以前に伊学協会の主事をしていたこともあり、伊語講座のための『伊語教授書』(Primo libro di lettura per uso degli studenti giapponesi, 1985)や『伊語読本』(Avviamento alla lettura della lingua italiana, 1910)などを著している。もちろん彼以前にもイタリアに滞在し、イタリア語を解する人は何人かいたが、伊東教授は我が国で最初にイタリア語を専門に学び教えた、つまり日本におけるイタリア語学の開祖といえる人である。

イタリア人教師のガスコは当時の在日イタリア公使館の書記官をしていた人で後に神戸の総領事となり、一九三七(昭和十二)年にその地で亡くなった。第二回卒業生で後に教授になった吉田彌邦によると、

ガスコ先生は青年時日本に来て或る地方の中学校で英語の教師をして居られたので日本人向きの教授法は頗る堂に入ったものであった。……先生は伊太利亜公使館を一人で切り回していた様に見えた程の名通訳官で言葉はチャキチャキの江戸っ子的で教壇でも洒落の連発、……なんでも先生の趣味は落語で寄席の名人といわれる者の芸風にたいしてすら一見識ある批評を加える力を有っていた程の通人であったと聞いた。(『外語学生時代』、『イタリア』一九四二年九月号)

と追憶して、ガスコの家の書齋には万葉集ほか幾種類かの古典もあつて、当時としては稀な日本語に精通した外国人であったと書いている。

嘱託講師の吉田秀男の経歴はよく知られていない。農学士であり、元来伊語の専門家ではないらしいが、一九〇三(明治三十六)年一月まで伊語講師を務めている。「近世初頭のイタリア都市―当時の人口論文献より推測されたるヴェネツィアの状態」(『社会経済学史』一九三四年七月号、三〇―四二ページ)、『イタリアの人口論研究―近世人口論の成立に対する其寄与』(日伊協会、一九四〇年)と題した二つの論文があり、後者はレオナルド・ダ・ヴィンチ賞を受賞しており、その当時の肩書は商工省嘱託となっている。

一九〇二（明治三十五）年の第一回卒業生は四名で、そのうち粟田三吾は翌年一月に講師に任命され、翌年九月に助教授、一九一二（明治四十五年）年には教授となつて、語学文学を担当し、明治、大正、昭和にわたつて在職し、一九三八（昭和十三年）年に停年になつた後も講師として留まり、終戦直前の一九四五（昭和二十年）年七月までの約四〇年の長い間東京外語で教鞭をとつた。学究肌の教師で伊語学伊文学の教授・研究に専念した。

第二回卒業生（一九〇四年）も四名で、ツーリストビューローで活躍した石田善太郎や外務通訳生となつた浜口光雄のほか画家・作家で著名になつた有島壬生馬、粟田とともに伊語科の専任教授として外語に残つた吉田彌邦が輩出した。

有島生馬（本名は壬生馬）は有島武郎の弟で、画家、作家、翻訳家として活躍した。たまたま一九一七（大正六）年に文部省が東京外語の校名を「東京貿易殖民学校」と改めることを提示したのに対し、学生はじめ学校当局や先輩のなかから猛烈な反対運動が起こつたが、有島先輩が先頭にたつて運動を指導し、長期にわたつて闘い、改名を撤回させることに成功した。

吉田彌邦は伊語科創設の翌年にひとまず別科に入学している。次いで一九〇〇（明治三十三年）年に本科の伊語学科に入学し、一九〇四（明治三十七）年、日露戦争勃発の年に卒業後、しばらく母校の教務課に勤務していたが、一九〇八（明治四十一年）年講師に迎えられ、その翌年助教授、一九一八（大正七）年教授に昇進し、粟田教授とともに伊語学科の専任として長年教鞭をとり、一九三九（昭和十四）年に停年を迎え、講師として一年留まつた後に退任、イタリアから帰国したばかりの柏熊講師が後を継いだ。粟田が語学文学を専門に教えたのにならして、吉田は語学のほかに特にイタリアの歴史や政治・経済が専門であつた。

日本人の教官としては粟田、吉田両教師のほかに、深澤理三郎（明治四十二年、伊語学科卒業）という人が一九二



有島生馬

二（大正九）年から二三年までの間臨時に伊語の講師を務めているが、それは粟田教授が一九二二年から二三年にかけて、吉田教授が一九二三年から二四年にかけて、文部省在外研究員としてイタリアに滞在していた期間に深澤講師が代講を依頼されたからである。

このように創立以来約四〇年余りの間、二人の日本人の教官と一人のイタリア人教師で本科、専修科及び速成科の語学の授業を担当していたのである。しかし外国人教師はしばしば交代している。時代順に名を挙げてみると、アルフォンソ・ガスコ（一八九九—一九〇一年）、チエーザレ・ノルサ（一九〇一—〇六年および〇八年）、チエーザレ・スコラステイ（一九〇六—〇八年）、ティーム・パストレッリ（一九〇九—三一年）、カプリエーレ・フォルモーサ（一九三一—三七年）、ジュゼッペ・ピヤジョーニ（一九三七—三八年）、カプリエーレ・サロモーネ（一九三九—四〇年）、ジョヴァンニ・キエーザ（一九四〇—四六年）

のほかジュリアーナ・ストラミジヨリーがキエーザ神父の後を継いで、新制大学になってからも長年教えた。

学生の修業年限は一九二五（大正十四）年入学までは三年であったが、一九二七（昭和二）年入学から一年延長されて四年制となった。一九四四（昭和十九）年に校名が東京外事専門学校と改められると再び三年制が復活し、一九五一（昭和二十六）年三月にその最後の卒業生を送るまで続いている。その間一九四六（昭和二十一）年三月から一年余り高橋久が講師を務めた。創立後外事

専門学校が廃止されるまでの本科の入学志願者、入学者、卒業者の数は次のとおりである。

	志願者	入学者	卒業者
明治三十二年九月	一四名	六名	七月 〇名
同三十三年九月	一五名	〇名	七月 〇名
同三十四年九月	一五名	一五名	七月 〇名
同三十五年九月	三二名	一七名	七月 四名
同三十六年九月	一九名	一四名	七月 〇名
同三十七年九月	一六名	一〇名	七月 四名
同三十八年九月	〇名	〇名	七月 七名
同三十九年九月	一名	一〇名	七月 三名
同四十年四月	七名	六名	三月 四名
同四十一年四月	六名	五名	三月 〇名
同四十二年四月	五名	四名	三月 六名
同四十三年四月	七名	六名	三月 五名
同四十四年四月	〇名	〇名	三月 四名
同四十五年四月	二名	〇名	三月 四名
大正二年	三一名	一七名	三月 二名
同三年四月	〇名	〇名	三月 〇名
同四年四月	〇名	〇名	三月 〇名
同五年四月	二六名	一四名	三月 六名
同六年	〇名	〇名	三月 〇名

同十二年四月
同十一年四月

同九年四月
同十年四月

同七年四月
同八年四月

同五年四月
同六年四月

同四年四月

文	拓	貿	法	文	拓	貿	法	文	拓	貿	法	文	拓	貿	法	文				
九名	〇名	〇名	四名	二名	四名	〇名	二名	六名	六名	三名	〇名	〇名	五名	八名	三名	〇名	二名	二名	法一〇名	文三名

四名	〇名	六名	九名	三名	一名	〇名	五名	七名	三名	二名	〇名	二名	七名	三名	三名	〇名	四名	七名	二名	六名
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

三月	三月			三月	三月			三月	三月			三月	三月			三月	三月			三月	拓五名
二名	〇名	〇名	五名	三名	三名	〇名	〇名	五名	二名	二名	〇名	三名	四名	三名	一名	〇名	〇名	〇名	〇名	〇名	〇名

簿「一九九八年」より作成)

右の表で不明となっているのは、第二次大戦から終戦後にいたるまでの資料が欠けているため、志願者や入学者の数がわからないのである。一九一九(大正八)年には各学科が文科、貿易科、拓殖科に分けられ、一九二七(昭和二年)年には文科が文学科と法律科に分けられたが、カリキュラムの上での実施は第二学年からであり、それらの卒業生が出たのはさらに二、三年後になっていくわけである。

志願者数は第一志望の数であり、年によつては入学者が志願者の数を上回っていることがあるのは、第二、第三志望で入学したか、あるいは第一志望でも同学科内であれば貿易科から文科へとまわされることがあったためである。特に大正十年代からは入学倍率が高くなり、一九二四(大正十三)年には文、貿、拓合わせて一九名の入学者にたいして第一志望が六九名、第二志望七〇名、第三志望一〇五名であったし、一九三七(昭和十二)年には二二名の入学者にたいして第一志望二九名、第二志望三一三名であった。

以上は本科についてであるが、ほかに専修科(一九〇四年までは別科と呼ばれていた)と速成科とがあった。いずれも語学のみを修めるコースである。専修科は夜学で語学の授業は週に一〇時間あり、二年で修了する。速成科は週に一〇時間以上の授業を受け、一年間で修了する。一九四九(昭和二十四)年にこの二つの科は廃止された。

イタリア語の別科、専修科と速成科の修了者数は次のように記録されている。ただし専修科については一九三〇(昭和五)年以降、速成科については一九四二(昭和十七)年以降の記録が残っていない。

別科

明治三十四年七月一名

同三十五年七月一名

二 東京外国語学校伊語学科（新制大学発足以前）

同三十六年七月一名

専修科

明治四十五年三月一名

大正四年三月一名

同六年三月二名

大正九年三月二名

速成科

大正十一年三月十二名

同十五年三月十二名

昭和三年三月八名

同五年三月五名

同七年三月三名

同九年三月六名

同十一年三月三名

同十四年三月六名

同十六年三月六名

大正三年三月一名

同五年三月一名

同七年三月三名

昭和四年三月五名

同十三年三月六名

昭和二年三月六名

同四年三月六名

同六年三月三名

同八年三月二名

同十年三月三名

同十二年三月二名

同十五年三月四名

〔東京外国語学校一覽〕各年度版より作成

ほかに、陸海軍の委託生を受け入れる選科というのもあったが、一九二一（明治四十四）年から一九三九（昭和十
四）年までの間に二〇名の陸海軍将校がイタリア語を学んで修了している。

また、東京音楽学校委託特別修業生（修業年限二年、週六時間）が一名、一九一四（大正三）年に修了している。

本科の授業時間は現在のように一時間が一時間三〇分ではなく、丸一時間であり、専門語学は週に二〇時間くらいであったが、時代により多少増減があった。しかも、一九一九（大正八）年には、第二学年から各語学科が文科、貿易科、拓殖科に分けられ、さらに一九二七（昭和二）年には文科が文学科と法律科に分けられ、語学の時間がそれぞれにより、また学年によってわずかながら異なるようになった。

一九四一（昭和十六）年度までのイタリア語の毎週の授業時間数は次のように記録されている。

	(一年)	(二年)	(三年)	(四年)
明治三十二年	二四時間	二四時間	二四時間	
同三十三年	右に同じ			
同三十四年	一八時間	一八時間	一八時間	
同三十九年まで	右に同じ			
同四十年から同四十五年まで	二二時間	二二時間	二二時間	
大正二年から同七年まで	二二時間	二〇時間	二〇時間	
同八年から同十五年まで	文科二三時間	二二時間	一六時間	
	貿易・拓殖科二三時間	二二時間	一四時間	
昭和二年から同十六年まで	文学・法律科二〇時間	一七時間	一五時間	一五時間
	貿易・拓殖科二〇時間	一七時間	一七時間	一三時間

〔東京外国語学校一覽〕各年度版より作成

2 イタリア語教官の専門、業績、活動

明治・大正時代には仏語、独語、露語のように、イタリア語ではなく伊語と言うことが多かったようである。したがって学科名も伊語科とか伊語学科と言われていた。正式には伊語学科であつたらしい。一九一一（明治四十四）年には伊語部と改められたが、一九四四（昭和十九）年にはさらにイタリア科と改められた。

ところで初代伊語教官の伊東教授は、前に述べたように、最初フランス語を学び、後にヴェネツィアに留学した人である。留学前に彼が日本でイタリア語を学んだかどうかについては記録がない。当時は日本にはイタリア語を教える施設はなかったが、すでにイタリア語を話せる人もいた。東京には一八六七（慶応三）年から明治の末まで二〇人近くのイタリア人公使が交代しているし、公使館には日本人通訳官として吉田要作なる人がいた。一八七五（明治八）年頃からイタリア人からのお雇い外国人が来日しており、前述のアルフォンソ・ガスコなども一八八二（明治十五）年に来日し、東京外語で教える以前に公使館書記官を務めていて、数人の伊国人が滞在しており、彼らと接触してイタリア語を習う機会はもちえたと思われる。また、伊東が渡伊する以前にもヴェネツィアに中山譲治という人が一八七二（明治五）年から総領事として滞在し、岩倉具視一行を迎えている。

したがって、伊学協会や東京外語でイタリア語が教えられるようになる以前に対イタリア関係の仕事に携わった人たちは、実際に伊国人と接触することによりイタリア語を習得したわけである。伊東もそれらの人たちのひとりであ

ろうが、しかし他の人たちと違って、語学者であるためには、イタリア語をひとつの言語体系として認識しなければならなかったであろう。ただフランス語を習得していたので、イタリア語への転換は比較的容易であったろうと推測される。伊東はすでに述べた二種類の講読のテキスト以外に著作や翻訳は残していないようであるが、我が国で最初にイタリア語教育に当たった教官として、辞典や入門書の全くない時代に初学者に文法体系を説明し、読み書きを指導することに腐心し、専念したのだと思われるのである。厳しい先生であつたらしく、長い文章などを学生に暗唱させることによってイタリア語を実際に体得させる方法もとつたようである。伊東に習つた吉田彌邦は後年すでに外語を退官してからもそのときの辛さを回顧して、次のように書いている。

暗唱の辛さを思い出す毎に伊東先生の面影が浮かんで来るのである。然し語学者は単に伊文を邦文に訳するだけでは全く実用にならないので、此の如く暗唱の度数が加わる毎に舌の回りも円滑にゆき、外国語での演説、または対話等に際しても、それがどれ程助けになったかは計り知る事が出来ない程である。……この暗唱の辛さも結局よい修業であつた事を其後に於て痛感し、……感謝の念禁ずることが出来なかつたのである。〔外語時代〕「イタリア」一九四二年九月号

粟田三吾は語学文学が専門であつた。一学年の初級文法の時間には教授自身が作成した自筆の原稿のこんにやく版をテキストに使用したことがあるそうである。イタリア語初級文法の教科書はまだ出版されておらず、教室で口述筆記させるか、黒板に書いてノートに写させるかするよりほか仕方がなかつたのである。しかし独習用の入門書などはいくらか出版されていた。明治時代には、会話の手引き書ではあるが、『和伊仏三国通話』（曲木如長著、續文社、一八七六年）のほか、筆者の調べた限りでは、『伊太利語独習』（山田毅一著、岡崎屋、一九〇八年）だけである。大正期には一冊も出ていないようであるが、昭和に入ってから終戦までの間に十数種の独習書が市販されている。

それらのうち粟田の著した『伊太利語入門 付・不規則動詞』（三省堂、一九四〇年）がある。新書版型の一九六

ページの本であるが、内容は簡潔にまとまっていて、よい参考書であった。一九四一（昭和十六）、四二年頃卒業して兵役に服し、中国大陸の戦場を駆けめぐった先輩たちは背囊の中にこの小型の本を忍ばせて、暇あるときは取り出して復習したという。筆者が外語生の頃（一九五〇―五四年）にもこの書は市販されており、手頃な自習書として愛用していた。坂本鐵男が外語大の講師のとき、この入門書の中に一か所だけ誤りを見つけている。それは「2. 他動詞能動態」が受動態として動作主補語をとれることを容認している箇所で、坂本は「東京外国語大学論集 七」（一九二八年）に掲載された論文の中で指摘している。

ほかに粟田には「新編伊語読本」（伊太利亜学会、丸善、一九一三年）や徳尾俊彦と共編の「教科独習用新編伊語読本―独習用伊太利文典略解付」（大阪三島開文堂、一九二八年）がある。ついでながら、徳尾俊彦は当時の大阪外語のフランス語の教授であったが、兼習外国語としてイタリア語も教えていた。大阪外語にはその頃まだイタリア語学科はなく、一九六四（昭和三十九）年に設置された。徳尾教授は他にも「伊太利語四週間」（大学書林、一九三一年）や「イタリー語第一步」（白水社、一九三四年）などを著している。

粟田は、学習書以外に「中世紀時代の伊太利文学」（『世界文学講座一〇 南欧文学編 伊太利文学の発達とその特質』新潮社、一九三〇年、三五―六四ページ）、「アレスサンドロ・マンツォーニ」（『世界文学講座一〇 南欧文学編 人物研究』新潮社、一九三〇年、一九〇―一九八ページ）、「国語と文学（伊）、一 イタリア語の起源 二 伊文学より観たイタリア語」（『岩波講座 世界文学（伊）』一九三三年、一―三〇ページ）などの著書がある。

これらの著書からわかるように、粟田は初代の伊東教授よりもさらにイタリア語の研究を前進させて、入門語学や講読のみならずイタリア語史・文学史の分野の研究をきりひらいていった。「国語と文学（伊）」では俗ラテン語からロマンス諸語への発展を説明しながらイタリア語の起源について論じ、次いでシチリア派、清新体派とダンテの俗語、

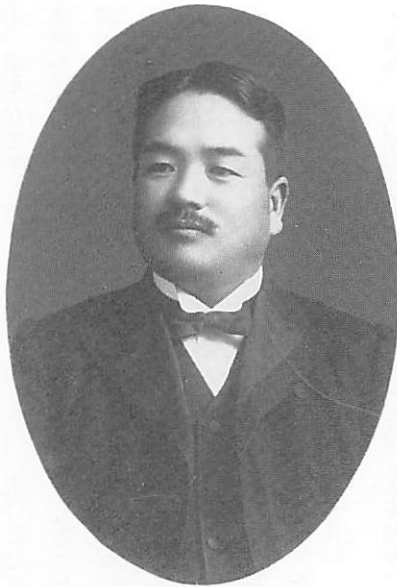


栗田三吾

十四世紀の作家とトスカナ方言の優位性、十六世紀のペ
ンボをめぐる言語論に続いてクルスカ学会や言語の純正主
義についての賛否両論、十九世紀のマンツォーニの言語革
新と近代イタリア語散文に至るまでの言語史を文学的観点
から概説している。この書や上掲のアレッサンドロ・マン
ツォーニについての著作からみて栗田は詩人・作家のうち
ではダンテとマンツォーニに最も関心を寄せ、その研究に
主力を注いだと思われる。なお、マンツォーニについて論
じた人はまだ当時日本にはいなかったようである。したが

って『I Promessi Sposi』(『婚約者』)を読み、それを我が国に紹介したのは栗田が最初であったと言えるであらう。
現在では一、二学年で基礎語学を終えると、後半の二年間の専門課程ではイタリアの文学史、言語史、歴史、思想
史、政治、経済などの講義や演習が行われる。しかし戦前では一学年の初級語学が終わると、各先生はそれぞれの専
門分野のテキストを用いて原書講読をしながら授業を進め、外国人教師が会話、作文を指導した。栗田は原書を口述
しながら書き取り練習をよくさせたそうであるが、教授は口ごもるたちでよく聞こえず、学生はいささか困ったらし
い。書き取りはそのつど提出させて、次の授業までに訂正して返してくれたという。

吉田はイタリアの歴史、政治、経済など、いわゆるイタリア事情が専門だった。しかし『イタリア語入門』(太陽
堂、一九三九年)や『伊日辞典』(藤堂高紹と共著、伊日辞典刊行協会、一九三八年)など語学の著書も出している。
この辞典は、筆者が外語の学生時代(一九五〇―五四年)にも古書として入手できたが、現在の伊和辞典に較べると



吉田彌邦

語数は少なく、熟語や例文はなく、初級が終わると余り役に立たなかった。このほかにも、吉田著ではないが、『伊太利語辞典』（井上静一著、第一書房、一九三六年）があつたが、語数はさらに少なく、学生たちは二年目からはコリンズの伊英・英伊辞典やジנגレリの伊伊辞典を丸善などから取り寄せる者もいたようである。しかしこの二冊は当時としては貴重品であり、最初の伊語辞典として、その編集も大変であつたと思われる。

吉田の学術的な書としては、「ニッコロ・マキアヴェルリ」（『世界文学講座一〇 南欧文学編 人物研究』新潮社、一九三〇年、一六〇―一七〇ページ）および翻訳書『君主経国策』（マキアヴェルリ著、吉田彌邦・松宮春一郎訳、興亡史論刊行会、一九一八年）がある。『イタリア史話』（ラジオ新書、一九四〇年）は教授が一九四〇（昭和十五）年六月に一週間にわたってNHKで放送した文章に、付録として「イタリア本土の印象」と題する記事を付け加えて日本放送出版協会より出版されたものである。日独伊三国条約が締結された時代の書として、特に近代の部がファシズムの歴史になっているのはやむをえまい。付録は教授が一九二二（大正十二）年から足掛け二年在外研究員として滞在したときの記録をもとにイタリアの各都市の印象を綴つたものである。

吉田は学究肌の粟田に較べるとむしろ実務的であり教務課参与や運動部長を務め、生徒のめんどうみもよかつた。在伊中には当時の皇帝ヴィットリオ・エマヌエーレ三世に拝謁し、二時間半にわたって日本の学会のことなどを説明したり、教皇ピオ十一世謁見の機会をえたほか、学者、名

士、学生など多くの人と接触した。また、来日したイタリア人の世話や通訳などで進んで便宜を提供した。ときには講演を頼まれたり雑誌に執筆したりすることもあった。それらは「伊太利の現状」(東京外語創立第二十五周年記念講演、一九二二年)、「イタリー—国民思想の新方向及びバ爾幹バルカンの近状」(「改造」一九二九年一月号)、「ムッソリーニの演説の印象」(「改造」一九二九年三月号)、「伊太利人と小麦袋」(「政界往来」一九四〇年十一月号)、「今昔」(「日伊文化研究」一九四一年十一月号)、「イタリア語を学んだ頃の思い出——外語学生時代」(「イタリア」イタリアの友の会、一九四二年九月号)などで、政治や時事問題を取り扱ったものが多い。

在外研究で渡伊する前にも、一九一九(大正八)年にイタリア人の商業活動視察のため中国の上海に出張しているが、その地でイタリアの商業会議所会頭などと会談して、伊国と中国との貿易が我が国と中国のそれよりも盛んであるため、工業が伊国の方が進歩していることを知り、また、日伊間の商業・経済上の交流が微々たるものであることを嘆いており、そのことを講演「伊太利の現状」の中で述べている。

外国人教師アルフォンソ・ガスコとチェーザレ・ノルサについては吉田の学生時代を回顧した随筆などに多少記述が見られるが、他の教師についてはほとんど記録がない。ガスコは、すでに述べたように、非常に日本語に堪能な人であったそうで、一八八二(明治十二)年から一九三七(昭和十二)年までの長い間日本に滞在した。

ノルサは吉田が教えを受けた先生で、最初イタリアの海軍兵学校で英語の教師をしていた。スペイン語やロシア語にも通じていたし、和文伊訳が得意であったというから、よほど語学のできる人であったのだろう。ただガスコとは対照的で「自分からは積極的に指導教育せんとする風がなく、怠けたければ勝手に怠けと云うようなやり方であったので、結局我々は自分で調べて其の難解を質問することにした」(「前掲「外語学生時代」) 一方で、生徒たちはこそって作文を書いては教卓を囲み、添削をもらったということである。

その他のイタリア人教師については、ティーム・パストレッリがヴェネツィア高等商業学校出身の経済学士であり、ガブリエーレ・フォルモーサはローマ商科大学教授であったということのほかには知られていない。ガブリエーレ・サロモーネとジョヴァンニ・キエーザについてはこの二人に教えを受けた先輩たち（一九三九―四六年頃卒業）に聞きることができる程度である。

伊作文や会話を主に担当したサロモーネはナポリの出身で、陸軍中尉であったため、日独伊三国条約が結ばれた一九四〇（昭和十五年）年に軍務に復帰するため、着任後わずか一年半で帰国することになった。イタリア科の級友たちは金を出し合って日本の短刀を買い、見送った東京駅のホームでせんに贈ったという。サロモーネはアフリカ戦線に従軍中に戦死したそうである。後任のジョヴァンニ・キエーザはカトリック神父で、北伊はピエモンテ州の出身であるためか、南伊のサロモーネとは違って冷静できちようめんな性格で、文法や会話のほかに時折ダンテの話などに及ぶこともあった。

3 一九五一年までの卒業生

一九四九（昭和二十四）年に東京外国語大学へと昇格したが、その前年の入学者は一九五一（昭和二十六）年に最後の外事専門学校を卒業したわけである。この卒業生のなかには新制大学へ編入した者もいた。ところで、すでに見たとおり、一九四四（昭和十九）年に外事専門学校と改名されるまでは大体隔年の募集で、学生数もわずかであった。一八九九（明治三十二年）年以後一九一九（大正八）年までは卒業生は各年平均四、五名、しかし一九二二（大正十一）年からは一〇名を超え、一九三七（昭和十二）年には一七名、最も多かったのが一九四二（昭和十七）年で二三

名となっている。このクラスは入学者が一六名であったが、前年の留年者が混入したらしい。隔年募集であれば留年すると二年遅れてしまうわけである。

また、そのころは外語イタリア科とは関係なく、「イタリアの友の会」という組織があった。この会は雑誌「イタリア」を発行するほか「イタリア語学校」を運営していて、麴町にあった伊太利亜文化会館内に教室をもち、夕方の授業で初級、中級、上級のコースをそれぞれ三か月で修了させる一般人向きの講習会を開いていた。さらに京都帝国大学文学部には以前から特にダントに興味を抱く学者がいて、一九四〇（昭和十五年）年にイタリア語学イタリア文学の講座が設置されている。その少し前の一九三七（昭和十二年）年には日伊学会が発足しており、三九年には日伊文化協定が結ばれ、その翌年には明治期から続いていた伊学協会が日伊学会と合併して日伊協会が誕生した。もともと日伊協会は終戦の翌年、一九四六（昭和二十一年）年にいったん解散し、一九五〇（昭和二十五年）年に再び設立されている。

大正末期からイタリア語学習者が漸次増加してきたのは日伊間の政治・軍事的関係に触発されたこともけっして否定することはできないが、むしろイタリアについて殊に文学や芸術にたいする関心が人々の間に浸透していったためであろう。伊語学科卒業生の中からは二人の教授のほかには有島生馬、岩崎純孝、下位英一、柏熊達生（本名は宜三）などが翻訳、多数の翻訳や評論、研究によってイタリア文化の紹介に努めた。東京外語のほかに京都大学文学部やその他の大学および文学者、評論家の間にもイタリア文化や特に古典に興味をもつ人がいたようで、「大正―昭和二十五年期における日伊交流―文献目録―」（日伊協会編、イタリア書房、一九九一年）によるとこの三十九年間にイタリア文学に関する翻訳、評論、研究など雑誌に掲載されたものも合わせると概略七八〇点は発表されたことになっている。歴史、思想、芸術に関する出版を加えるとさらに多くなるであろう。

すでに明治時代においてもイタリアに関する研究や翻訳などがかなり出版されており、文学だけに限ってみてもおよそ百点を数える。しかしイタリア文化に関心をもつ人の中には本来は他の分野の専門家であった人もいて、原語からではなく英語やドイツ語などの翻訳や文献を介して著作がなされる場合も多かったと推察される。

ところで東京外語イタリア科の学生の中にも、必ずしも最初からイタリアに関心があつて入学したのではない者もいたはずである。そのことは上にすでに挙げたように第二志望の志願者が多かったことから納得できる。また、卒業後実際に習った語学を使う仕事とか、イタリアと関係のある職につくことは難しいし、実際に卒業生の中でもそれをなしたのがごくわずかである。ある先輩の話によると、一年生の一学期が終わった頃、粟田教授が「これで大体イタリア語科がどういふところかわかったかと思ひます。これを続けても卒業して社会に出てどうなるかということばかりません。やめるなら今やめたほうがよい……」と言つたそうである。

吉田も学生時代を回顧して、

当時伊語科入学のときはいつも募集人員に不足を告げ、……隔年三、四名しか出なかつたのである。之れを今日幾倍の応募者が殺到しているのを見て、かくも世の中が変わつたかと思ひ、感深くする……三、四十年前に於いては伊太利亜語を學者は全く一風変わった物好きか何かの様に世間から思われ、伊太利亜語を學ばず親たちまでが學資の用途を知らない者じやと非難された程であつた。今日といえどもまだ伊太利亜の事情がよく我が國に知られていないので此の傾向が全く去つたと云う程ではないが昔日に比ぶれば隔世の感があり、また時には伊太利亜語を學んだ者に対しては着眼がよかつたなどのお世辞すら聞くこともある程である。

〔今昔〕「日伊文化研究3」一九四一年十一月

と書いている。しかしこのようにイタリア語に対して世間の関心が低いのは「決して欧州文明の母体とも云われる伊太利亜の國語の価値に対してではなく、英米独仏のごとき資材を多くもつ國の勢力が圧倒的に日本の市場を壟斷し

ていて日伊間に於ける経済関係が稀薄であるためにイタリア語の使用範囲が非常に狭いと云うだけの事なので……」
 「外語学生時代」「イタリア」イタリアの友の会、一九四二年九月号」とヨーロッパ文明の源であるイタリアの言語文化に対する人々の評価は高いが、ただ実用的価値が低いだけであると考えている。

そこでこのように実用性の乏しいイタリア語を専攻して、イタリア語学科の卒業生はどのような分野で活躍してきただけであろうか。また実際にイタリアと関係ある仕事についていた人はどのくらいの割合であつたらうか。左に筆者の知る限りの範囲でそれらの先輩の氏名を挙げてみよう。

〔本科の卒業生〕

明治三十五年卒業 栗田三吾（東京外語伊語科教授）

明治三十七年 吉田彌邦（東京外語伊語科教授）、有島生馬（画家、作家、翻訳家）

明治四十二年 深澤理三郎（東京外語非常勤講師、イタリア語学校教務主任）

大正八年 高橋 寛（日伊貿易会社）

同十一年 岩崎純孝（翻訳家、評論家）、下位英一（東京外語大イタリア語学科教授、翻訳家）

同十四年 五十嵐仁（翻訳家）

昭和二年 前田義徳（朝日新聞特派員、NHK会長、日伊協会会長）、

山崎 功（読売新聞特派員、イタリア史研究家）

同三年 柏熊宣三（東京外語大イタリア語学科教授、翻訳家）

同六年 丸 弘（翻訳家）

同八年 奥野吟右衛門（東京外語大イタリア語学科教授、マンツォーニ研究家）

清水三郎治（朝日新聞特派員、翻訳家、日伊協会専務理事）、下村清（外務省、ミラノ総領事）、

同十二年 中村 修（外務省、在ヴァチカン大使参事官）、石井彪（外務省、サンパウロ総領事）

二 東京外国語学校伊語学科（新制大学発足以前）

同十四年 大島恒男（三井物産ミラノ事務所長）

同十六年 後藤俊夫（朝日新聞社）、東川一郎（産業経済新聞社）、佐藤弓筈（筑波大教授）、池田茂（三井物産）

同十七年 田辺 健（外務省、ミラノ総領事、日伊協会専務理事）

同二十一年 高橋 久（東京外事専門学校講師、イタリア語学文学者、和伊辞典編集）

同二十二年 池田 廉（大阪外語大教授、イタリア文学研究家）、赤沢 寛（武蔵野音大教授）

同二十三年 木村裕主（毎日新聞特派員、イタリア現代史研究家）、永井三明（同志社大教授、イタリア史研究家）、

目方 照（イタリア美術史研究家）

同二十四年 井出正隆（イタリア文学研究家）

同二十五年 植田 寛（上野学園イタリア語講師）、桜井博章（上野学園イタリア語講師）

同二十六年 坂本鐵男（ナポリ東洋大教授、イタリア語学研究家）

〔専修科の修了生〕

明治四十五年 下位春吉（ナポリ東洋語学校教師、イタリア文学翻訳・研究家）

〔速成科の修了生〕

昭和九年 坪内 章（英文学・イタリア文学研究家）

同十四年 杉浦明平（作家、イタリア文学翻訳・研究家）

本科伊語学科卒業者職業別一覽（一九三九年五月調べ）

〔教育〕

大学、高等専門学校三名

陸海軍諸学校〇名

師範学校〇名

〔実業〕

会社、商店四三名

銀行四名

〔自営業〕

中学校〇名

商業四名

高等女学校一名

工業〇名

実業学校〇名

農業一名

その他の学校一名

その他六名

〔官庁〕

一般官公署二五名

新聞・雑誌記者一一名

外務省五名

協会、組合、事務所一二名

大使官、公使官一名

修学二名

領事官四名

兵役〇名

外国官庁四名

死亡一九名

帰趨不明三四名

計一八〇名

〔東京外国語学校一覽〕（一九三九年）

三 東京外国語大学発足以降

1 発足期 一九四九—一九五六年

名称の変遷

一九四九（昭和二十四）年五月三十一日、新制国立大学のひとつとして、東京外国語大学が、その前身である旧制